

# 幼稚園児の制服の変遷に関する研究

## —幼稚園児のエプロンの起原と復元—

武石 仁美

A Study on Historical Change of Kindergarten Uniform  
—The Origin of Apron and a Trial of it's Restoring—

Hitomi TAKEISHI

### 1. 研究の目的

最近では、幼稚園児がそれぞれの園の特色を表現するために制服を着用する幼稚園が増加している。かつて、制服の普及以前では幼稚園児の服装は、白いエプロンとその胸に白いハンカチを吊り下げるのが一般的であった。テレビの中で大人のタレントが幼稚園児の表現をする時は、白いエプロンによって表現されていた。

さて、この白いエプロンをいつ頃幼稚園児に着用させ、それが全国の幼稚園に普及していったのだろうか。すでに山内昭道によって、エプロンを着用させたのは、東京女子師範学校附属幼稚園であったという論稿がある。

本研究は幼稚園児の服装とエプロン着用から現代の制服の着用にいたる変遷を明らかにし、特にそれぞれの時代相との関連について考察するものである。

以下、次のように研究を進める。

- 2、幼稚園児のエプロンの普及
- 3、幼稚園児のエプロンからスモックへの変遷
- 4、幼稚園児の制服の普及

### 2. 研究の方法

- (1) 婦人と子ども、明治34年第1巻第2号に掲載されているエプロンの図によって復元を試みる。
- (2) 各幼稚園の記念誌に掲載されている園児の絵画と写真から、それぞれの時代の園児の服を明らかにする。
- (3) それぞれの時代の大人の服装と、幼稚園の先生の服装を調査する
- (4) それぞれの時代背景の影響を考察する

### 3. 研究の内容

#### (1) 東京女子師範学校附属幼稚園の園児達の服装

明治9年(1876)、東京女子師範学校附属幼稚園が日本で最初の幼稚園として創立された。現お茶の水女子大附属幼稚園である。入園した子どもたちは政府の地位の高い役人や経済人ど上流階級の子どもたちであった。

この幼稚園児の描かれた絵画が三点ある。

明治10年頃の実写図「幼稚園鳩巣遊戯の図」と、明治12年頃の実写図といわれる「幼稚園二十遊嬉」と武井耕雨女史が明治23年、日本美術協会秋期展に出品した「女子高等師範学校附属幼稚園の実況」という掛け軸画の三点である。



図-1 「幼稚園鳩巣遊戯の図」

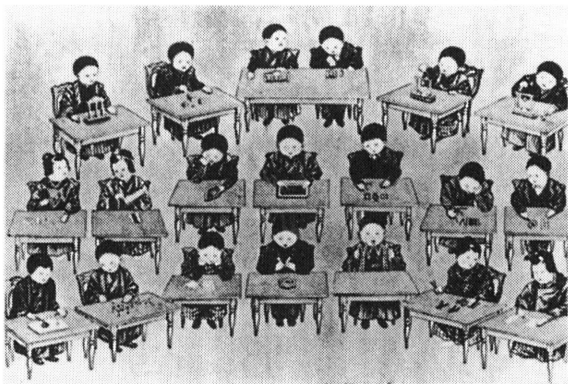


図-2 「幼稚園二十遊嬉」

先生が5人いるがオルガンを弾いている洋服の先生がクララであろう。

なお、子どもの洋服はおとなのミニチュアであり、子どものための子ども服はなかったであろう。

明治33年、野口幽香によって貧民幼稚園として創立され、今日、二葉保育園として存続している。その八十年史に、創立時の(明治33年、35年、45年)園児たちの卒業記念写真があり、それを見ると、庶民の子どもたちは全て着物であったことがわかる。

図-1の「幼稚園鳩巣遊戯の図」は、幼稚園の創始者 フレーベル(friedrich frobel)の「母の歌と愛撫の歌」の中の1つといわれている。

洋装の女性はドイツ人の松野クララ、和服の2人は豊田英雄と近藤濱と考えられる。園児の人数を見ると、

男子14名、女子18名で、男子の洋服7名、女子の洋服2名

庶民とちがって正に上流階級の子どもたちだったことがよくわかる。

図-2の「幼稚園二十遊嬉」の図では、

男子10人、女子10人で、洋服の子どもは、男子2人、女子0人である。

図-3の「女子高等師範学校附属幼稚園の実況」では、

男子18人中洋服12人、女子22人中洋服7人である。

(2) エプロンについて

1) 幼稚園児へのエプロンのす  
すめ

「文献としては、明治34年の『婦人と子ども』第一巻第二号に、「前かけ」の作り方を「育児女」が書いている。<子供は活発に運動するものなり其際には遠慮会釈なく膝を突き或いは土砂中に座し或いは転々とするを好む然るに其衣服は假令粗末にして如何に汚すとも可なる地質を撰みたるにもせよ日々清潔に保たしめんとするは容易の業にあらざ故に近時流行する処の前かけ様のものを相当の粧飾を施して用いなば打見たる処も可愛らしく労を省く上にも大に宣しきものなり今其形の簡單なるもの一二を挙げん>として、図示してある。

このころになると、幼稚園では、子供たちを活発に戸外で遊ばせる保育になっていたことがわかる。つまり、お行儀よく椅子に座って机の上で恩物进行操作したり、先生と共に上品に動くのではなく、子供たちに自由な遊びをさせるようになっていたことがうかがえる。



図-3 「女子高等師範学校附属幼稚園の実況」

そして、<白キャラコをもちいたるは

純白にして清潔なれども汚れやすし稍色つける更紗形のキャラコ若くは織紋りの毛織子に白色のキャラコ麻又は絹を以て装飾をなしたるは美しく一種の飾りとなる> という説明と、二種類のデザイン画と寸法図が示されている。

「前掛」と「エプロン」について調べてみると、<エプロンといえば現在では、台所や室内の掃除用として考えられているが、もとは装飾用の衣服として重要なものであった。日本でいう前掛はもともと前垂として膝の前に垂らし、衣服の汚れを防ぐために用いる布であった。是に対してエプロンは衣服の一部で、これを西洋前掛と呼んだ時代も合った>と、『服装大百科辞典』（昭和四十四年文化出版局）に説明されている。

そこで、デザイン画を見ると、日本の前垂や前掛ではなく、胸あてがあるので、これはエプロンである。しかし、エプロンという言葉は、明治四年に刊行された橋爪貫一の『世界商売往来』に「Tーブラン」とあるのが最初と言われる。その訳語には「蔽膝」（へいしつ）という中国語があてられ、古代中国の儀礼用の前垂の名称であるという。（以下、富田仁『舶来事物起原事典』昭和六十二年引用）明治二十九年三月十日の『風俗画報』百十号の橋本花波「前垂」に <我国の前垂は己が不浄を避くるにあらず物の汚穢を禦ぐのみとあり全く意ごみよけに取、皆ゆめ装飾などにはあらざるなり、西洋にもエプロンと云ひて前垂に似たるものあれど暫くおく。かくて大流行の今日となりてはかよふのことを以て足れりとせず甚しきはよそ行き前垂とまで云ひつので全く装飾の一ツに加はれり>とある。

つまり、汚れを防ぐための実用としての前垂が、いろいろと装飾をつけたおしゃれ着としての前垂となって、このころ流行していたようであるが、エプロンはまだなかったようである。

したがって形はエプロンだったが、「前かけ」としたと考えられる。しかし、エプロンをまねているこ

とは明らかである。

さて、エプロンが「西洋前掛」または「西洋前垂」の名称で紹介されたのは明治四十年代初めといわれ、永井荷風『新橋夜話』（明治四十三年）に「西洋前垂」として記述された。明治、大正、昭和にかけて、ミルクホール、カフェーの女給さんの、胸から掛けた白いエプロン姿が、この時代の、流行であり、エプロンのイメージであった。

エプロンは、西洋では貴族や上流階級の女性のためのもので、ひだやいろいろな装飾をつけて、十七、八世紀に流行したものであるという。」<sup>1)</sup>

## 2) エプロンの復元

そこで、「婦人と子ども」誌に示されたエプロンの図にしたがって復元を試みた。

まず、図-4のエプロン(一)の説明が文献に記述されているので述べることにする。

「(イ)及(ロ)は釦を附する所にして(イ')及(ロ')は釦を止むる穴なりとす而して(イ)は(イ')に(ロ)は(ロ')にかくべし(ハ)の部は寄せ襷にして前膝の所に弛みを興ふる為なり(ニ)は隠しにして子供用のハンカチ及鼻紙を入れる、處なり(ホ)は飾りの為襷とりし切れを縫ひ付けたるなり

裁方子供の大小により多少の斟酌を要すとも四五歳位ならば大凡下の寸法による。

縫方 至て簡単にして相富の縫代とりて図に示す如く縫ひ合はすれば可なり」とある。

この復元は、原寸の二分の一の寸法で雛形を製作した。

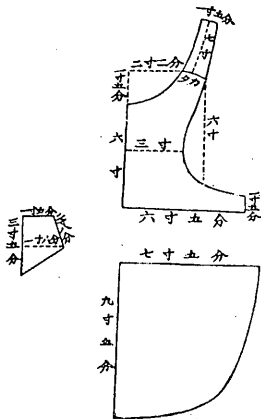


図-4 エプロン(一) 裁ち方の図

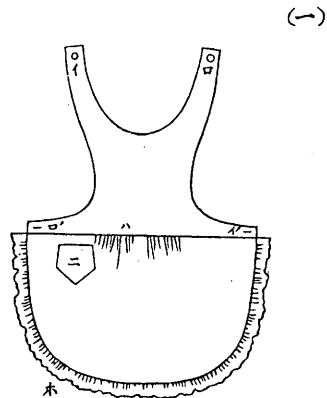


図-5 エプロン(一)の出来上がりの図

図-4は、エプロン(一)裁ち方の図で、図-5は、エプロン(一)の出来上がりの図、そして、写真-1が、図-4、5のエプロン(一)を復元した完成写真である。

◎型紙の作成：「婦人と子ども」第一巻、第二号誌をもとに原寸の1/2の型紙を作成する。

寸法は、図-4の通りである。

◎用布と附属品：綿キャラコ、ボタン2個使用。

◎裁断：型紙に縫い代が加わっているものとし、図の通り見頃とポケットを裁断した

◎仮縫い：ウエストのダーツのしつけを縫う。

◎本縫い：上身頃と下身頃を縫い合わせ、ダーツのしつけを取るポケットを縫い付ける。

◎前身頃の前垂れ部分にフリルを付ける。

◎ボタンホールを作り、ボタンを付ける。

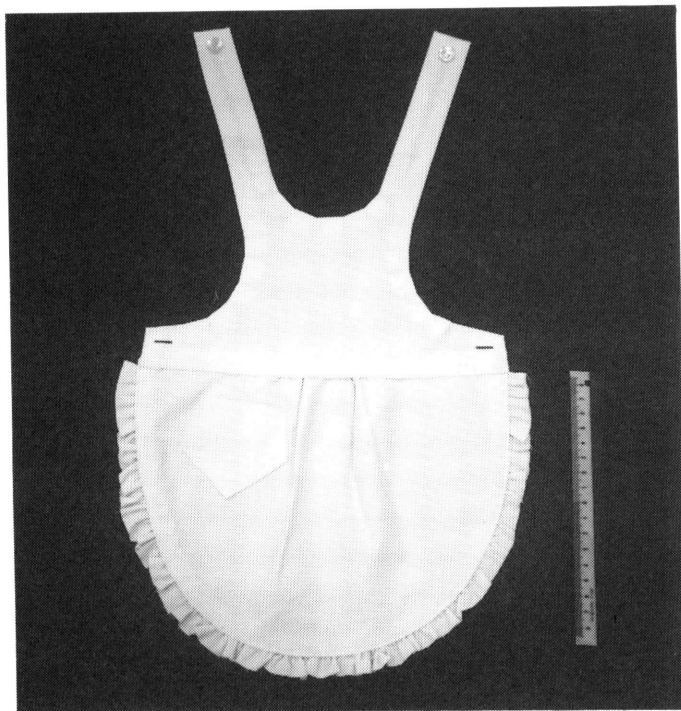


写真-1 エプロン(一)

◎アイロン仕上げを行う。

◎写真撮影、(写真-1)

写真-1のエプロンの特徴

◎前見ごろだけなので、短時間で、簡単に仕上げることが可能である。

◎前掛、前垂とあるように、後ろ身ごろがなく、肩ひもを背中クロスさせて両脇でボタンをとめる。(子どもの着脱には少々難しいと思われる)

◎ポケットの位置や大きさは、ハンカチやチリ紙を入れるために使用するため、あまり大きく作られていない。飾りポケットのようである。

◎前身ごろの下部にフリルを付けることで(男児、女児共)可愛らしさがみられる。

次の作品では、

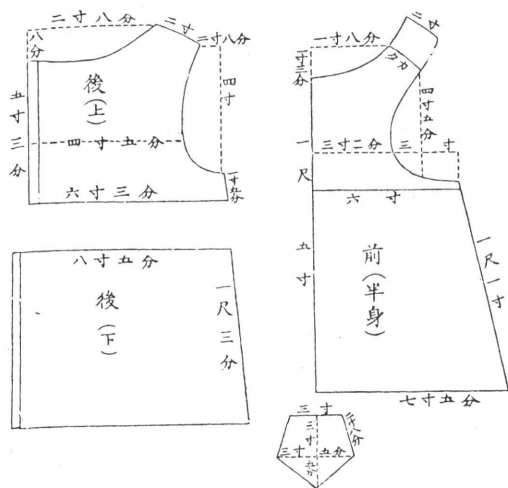


図-6 エプロン(二) 裁ち方の図

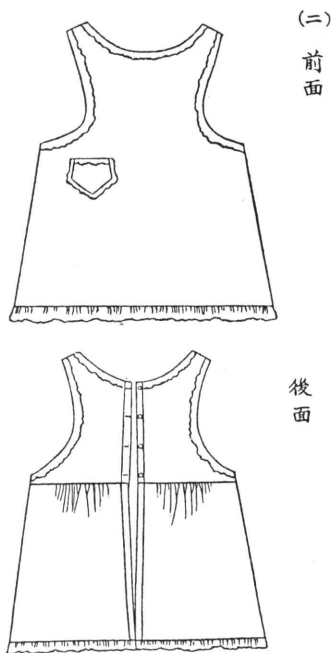


図-7 エプロン(二) 出来上がりの図



写真-2 エプロン(二) 前面



写真-3 エプロン(二) 後面

図-6は、エプロン(二)の裁ち方の図、図-7は出来上がりの図、写真-2(前面)、写真-3(後面)の完成写真である。

◎型紙の作成：「婦人と子ども」第一巻、第二号を元に、原寸の1/2の型紙を作成する。寸法は、図-6の通りである。

◎用布と附属品：綿キャラコ、綿バイアステープ、ボタン4個。

◎裁断：縫い代を取り、図-6に従って布地を裁断する(前身頃、後ろ身頃、ポケット)。

◎仮縫い：前身頃と後ろ身頃のダーツのしつけを縫う。

◎本縫い：順序は前、後ろ身頃のウエスト部分を縫い合わせる。ポケットを縫い付ける

肩、脇の縫合、ダーツのしつけをとる。説明文には記載されていなかったが、図-7の出来上がり図を見ると、袖ぐり、襟ぐりの部分に飾りがあり(不明)これをバイアステープと見立て取り付けて始末する。身頃の裾に共布で作ったフリル(1.5cm)を付ける。

◎ボタンホールを作り、ボタンを付ける。

◎アイロン仕上げを行う。

◎写真撮影、(写真-2、写真-3)

写真-2、3のエプロンの特徴

◎襟ぐり、袖ぐりは、バイヤステープで包みアクセントを入れた。

◎前身ごろは、切り替えのウエスト部分(左右)にひだを少し入れることで、ゆるみを持たせてある。

◎後ろ身ごろにボタンがあり、着脱の際に背中の中のボタンのとりはずしが、幼い子どもには困難と思われる。

以上、2点のエプロンの製作にあたったが、簡単な略式製図のため、細かい説明は記載されていないかった。そのため、少々不明(寸法)な部分や、縫い合わせのずれなどが生じたが、適宜調整し補正を行いながら復元を試みた。

3) エプロンの着用は、いつ頃から始まったか。

「幼稚園児がエプロンをつけるようになったのは、いつ、どこで始まったであろうか。

倉橋惣三は、<英国がえりの新しい着眼を以て、種々の改革を実行していた>東京女高師附属幼稚園主事安井哲子について、<幼児の弁当いれとして、バスケット(空気の通るために)を用いはじめたことや、園内でエプロンを用いることなども、安井主事の創案であった>と述べている。(『子供讃歌』昭和二十九年)

安井は明治四十一年、二度目の英国留学から帰り、明治四十三年(1910年)六月、東京女高師講師と附属幼稚園主事になったので、それは、明治四十三年、四年のコトと考えられる。このころ、前に述べたように、エプロンが世間に知られ、使用されていたのであった。

しかし、前記、明治三十四年の「前掛け」の作り方と同じ号に、安井も『システイーとドミノー』という童話を寄稿しているので、この前掛を知っていたはずである。しかも、安井は明治二十九年、教育学、家政学研究のために英国へ留学し、明治三十三年七月に帰り、東京女高師教授舎監をしていた。この前掛が安井の提案であったのか、また、「育児女」が安井のペンネームであったのかは不明である。とにかく、明治四十三、四ごろ、お茶の水幼稚園で、エプロンとバスケットが始まり、またたくまに全国の幼稚園へ普及したことになる。<sup>1)</sup>

明治43年における幼稚園は、475園、国立1園、公立216園、私立258園存在していた。5歳児の就園率は1.7%であった。そして、幼稚園教育の模範は東京女子高等師範学校附属幼稚園であり、附属幼稚園で行うことは、直ちに全国の幼稚園へ普及する時代であった。

475園の幼稚園の記録は、今日のように写真が十分に普及していなかったことと、現代まで存続している幼稚園も多くないために、当時の幼稚園児の服装について、調査することを困難にしている。

次の大正時代になると、資料も残っているので、エプロンの普及について考察したい。

#### 4. おわりに

以上のように、お茶の水幼稚園の園児の服装と、幼児の衣服の上にエプロンをつけることの

提案を考察し、エプロンの復元を試みた。

明治34年に園児にエプロンをつけることが提案されたが、実際にエプロンをつけさせたのはお茶の水幼稚園主事の安井哲女史で、明治43年、44年の頃であったと考えられる。

エプロンを復元してみると、実用的であると共に、装飾的であることがわかる。和服を着た園児にも付けるように作られているのは、当時和服が子どもの一般的な服装であったからと考えられる。しかし、エプロンをつけることも、上流階級の子どもたちであって、庶民の子どもには高嶺の花であり、又、ハイカラな服装であったであろう。

小学校が義務教育となっていたが、5歳児就学1.7%の時代には、白いエプロンは、恵まれた子どもの象徴であったかも知れない。

子どもをとりまく環境は、貧富の差でも分るように、けっして明るい事ばかりではなかったが、当時の子どもたちの写真を見ても、子どもの表情には皆、笑顔がみられた。そのことが時代の背景とは逆に、明るい材料となり、強く印象にのこった。

「子どもはあしたが好き」(村石昭三より)とあるように子どもたちは、いつも明日に向かって、強く、逞しく、希望を持って成長していったと思われる。

## 謝 辞

本研究のきっかけを与えてくださり、ご指導いただいた山内昭道本学名誉教授に深く感謝いたします。

## 引用文献

- 1) 山内昭道：「エプロンとバスケット」現代保育7月号，フレーベル館，1991. p.42～43..
- 2) 西澤楯雄：復刻幼児の教育第一巻. 第二号. 名著刊行会，1979. 図版転載 p.23～26.
- 3) 岩本努、鈴木亮他：日本の子どもたち. 日本図書センター，1996. 図版転載 p.34～35.
- 4) 岡田正章：明治保育文戯集. 別巻，日本らいぶらり，1977. 図版転載 p.64.

## 参考文献

- 1) 文部省：幼稚園90年のあゆみ. 1966.
- 2) 文部省：幼稚園教育100年史. 1979.
- 3) 松本市：松本市立松本幼稚園百年誌. 1987.
- 4) 二葉保育園八十年史. 二葉幼稚園，1986
- 5) 今和次郎：服装研究.. ドメス出版，1972. (今和次郎集8)
- 6) 倉橋惣三：子ども讃歌. チャイルド本社，1954.
- 7) フレーベル、アンソニー.エル、ハウ著：母の遊戯及育児歌. 頌栄幼稚園，1987.
- 8) お茶の水女子大学文教育学部：年表幼稚園百年史. 国土社，1976.
- 9) 学苑 明治、大正期の被服教育に関する資料(三). 昭和女子大学近代文化研究所，1992.